

第五十三回中央教化研究会議 基調報告

人口減少とコロナの世界を生き抜くために

三 原 正 資

「T O K Y O 2 0 2 0」の年に入って八ヶ月余り、新型コロナウイルスによる災禍は世界中にひろがりました。その姿を、美術家・李禹煥リウウワンは「籠りの彼方」(『芸術新潮』二〇二〇年八月号)の中で、次のように描いています。

今、人類は、新型コロナウイルス禍で、恐怖におののいている。どの国どの街でも、人々は死の影に脅え、ひたすら時の去るのを待つ。誰から何をうつされるか、それを誰にうつすかもしれない、瞬時不安が増幅し、何処でも死が付いて回るといふ、誠に黙示録的な事態が繰り広げられているのだ。(略)国境が閉鎖され、外出が制限され、人々は旅行や集会や人との接触を避けなければならぬ事態に追い込まれたことだ。(略)パンデミックで全世界が、このような状況下に置かれたことは、人類史上なかったことである。

本日の第五三回中央教化研究会議が、このように全国各管区からの参加者不在の状態で、講師の方々におかれましてオンラインでお話したたくという事態を、一年前、いったい誰が想像したことでしょうか。

ところで、新型コロナウイルス感染症の拡大によって広がったテレワークは人口減少によってあらわになった過

疎・過密の問題に、思わぬ影響を与えているようです。

京都大学こころの未来研究センター教授の広井良典氏は『毎日新聞』（二〇二〇年七月二二日）の特集「この国はどこへ コロナ時代に」の中で〈地方分散へかじ切る時〉と題して、次のように述べています。

人口の「都市集中型」社会は日本を破局に追い込む恐れがあり、「地方分散型」社会への切り替えが望ましい——。
（略）新型コロナウイルスの感染拡大で、三密（密閉、密集、密接）が起きやすい「東京一極集中」などのもろさが浮き彫りになった今、人口分散の必要性はますます高まっている。（略）コロナ禍を機に広がったテレワークは、働く場所をそれぞれの自宅などに分散させた。定着すれば、従業員は勤務先の近くに住む必要がなくなり、都心などに集中するオフィスも地方に移転したり、廃止したりすることが可能になる。

このような広井氏の指摘した事態が、今後拡大していくならば、地方寺院の過疎化の流れにも変化が生まれるかもしれません。そして、私たち僧侶の側にも大きな意識の変革が必要だと思います。

私は、伊藤佳通師が、かつて『日蓮宗新聞』（二〇一二年七月一〇日）に執筆した〈論説——仏教衰退の責任はどこに？——〉を思い起こします。

伊藤師は、次のように述べます。

過日、（略）ある本宗寺院のご住職が、葬儀でいただく布施が急落していると仰っていました。

そのお寺の住職は話術にも長け、行動力もあり、檀家との関係も良好だという。いわば模範的な寺で布施が減ってきたことの原因を伊藤師は考えているうちに、アジアの仏教国で進行するイスラム化に思いあたるので。

インドシナ半島といえは仏教圏というイメージが未だに強い。確かに鬱金色の衣を纏った比丘や金色に光り輝く寺院は健在だから一見しただけではイスラム化など気づかないかもしれない。しかし人々の心の中から仏教の存在は確実に薄れつつある。(略) 実際、イスラム教に改宗したタイ人の多くに共通した認識がある。それは「仏教は何もしてくれない」ということだ。(略)

葬儀も年忌も祈りの儀式である。それは大切であるが、それで貧しい人たちが救われるわけではない。むしろそれが経済的な負担ですらある。(略) 豊かな人たちのみを対象とした宗教はいずれ不要と見なされるに違いない。

すこし前のことですが、都内の喫茶店にいたときのことです。お盆の頃でしたか、お客とマスターの会話が私の耳に入ってきました。マスターが「あなた、もう帰るの?」と尋ねますと、お客は次のように答えたのです。「今日は、坊主が金を取りにくる日だ」。

私はこの返事が耳に残り、忘れることができません。「仏教離れ」はともかく、「お寺離れ」「僧侶離れ」は進行しています。

瀬戸内寂聴師と美輪明宏氏の対談をまとめた『びんぼんぼん ふたり話』(集英社文庫 二〇二〇年)には、現代の宗教の実態について辛辣に語った部分があります。

瀬戸内 アハハハハ。信仰と宗教、全然違いますね。

美輪 宗教というのは流通機構の間屋さんであって、企業だと私は思うんです。その企業の中には優良企業もあれば、豊田商事みたいなインチキ企業もある。

だから、たとえば法王だとか、教え主さんだとか、宗教によって呼び方が違いますけど、そういうトップは会長、

社長で統一すればいい。権大僧正とか、枢機卿だとかは全部副社長だとか、専務だとかいう名前にすればいい（笑）。お寺を預かっている住職さんだとか、教会の牧師さんや神父さんは支店長でいい、と。それからいろいろ勧誘して回っている人たち、折伏したりしている人たちは、みんな営業部員。

宗教は三井、三菱、住友、丸紅と同じなんだから、たとえば住友ビルの玄関に入って、「私の魂救ってください」と言ったって、誰も救われはしません（笑）。

（略）

美輪 だから日蓮が怒ったんじゃないですか。

瀬戸内 だけど、それぞれの時代に、ちゃんと日蓮みたいな人が出てきたじゃないですか。今は、もうひどいですよ。お寺に入ったらお金を取ることでいいでしょう。（略）

この本は、集英社文庫から、この「夏の一冊」、八三冊の一冊として、キャンペーンされ、書店の目立つ場所に平積みされています。多くの若い人がとめることでしょう。

〈すべての命を守る〉ローマ教皇の呼びかけを解説した青山学院大学名誉教授本間照光氏は〈人類生存の日常と非日常〉『毎日新聞』二〇二〇年五月二一日に述べています。

フランシスコ教皇も、くり返し警告してきた。「金銭という神」の支配のもとで、弱者と難民、自然破壊と戦争が生み出される。さらには、核戦争すらも暴発しかねない、と。

七〇〇年前の「西土教主」（『立正安国論』）は、今日ではすべての人々の仰ぐ「金銭という神」であり、宗教です

ら、この「神」に支配されているのでしょうか。

ところで、この本では「宗教は企業と同じ」とされていますから、僧侶は一般の会社員と同じように、努力しなければならぬわけです。しかし、コロナ感染拡大によって、お盆の行事は大きな影響を受けたようです。二〇二〇年の夏が、習俗化した日本仏教没落元年になるかもしれません。

さて、本日の講師、中條曉仁先生には、二〇一八年の夏には広島県三次市、一九年の夏には山梨県早川町と、二度の調査をしていただき、私も同行しました。そして、その調査を受け入れて下さった三次市の田野岡亭悦上人、早川町の山本是温上人もご参加です。ありがとうございます。また、井出悦郎先生には、平成二八年（二〇一六）二月、千葉県清澄寺で開催された千葉教区教化研究会議でお目にかかったことがあり、そのとき、次のようにお話しになったことが心に残っています。

井出先生は、宗教界（お寺）は葬儀という大切な分野（業界）に、いとも簡単に他業界の侵入を許したと思いませんか、とため息をもらし、さらに、企業コンサルタント時代に、この会社は三年早く改革に着手したら、よみがえることができただろうに、手遅れで、残念に思ったと語られました。

本日は、私たちに對して、どのように指摘されることでしょうか。

さて、私は最初に、李禹煥^{リウフワン}氏の「人々は死の影に脅え、ひたすら時のさるのを待つ。（略）誠に黙示録的な事態が繰り返げられている」という文章を紹介しました。キリスト教の終末論、仏教の末法観は、決して過去の遺物ではなく、今後、私たちは、近代がもった進歩史観、未来への楽観論に厳しい目を向けるべきだと思います。

この度のコロナ感染拡大による自粛生活の中で、私は宗祖の『立正安国論』を読みました。

旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。

牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、すでに大半に超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし。

年の初め以来、TVモニターに映された世界各国のありさまは、まさにこのようなものでした。

しかりといえども、ただ肝胆を摧くのみにしていよいよ飢疫逼る。乞客目に溢れ死人眼に満てり。

わが国をはじめ多くの国々も、さまざまの手段を講ずるのですが、感染は拡大し、深刻な影響を社会の各方面に与えています。

このような状況の中、人口減少の進行とともに、地方のお寺の未来は明るくはありません。しかし、それでも、私たちが見るべきものは、人々が、社会が苦悩に直面している現実ではないでしょうか。

言い古されたことばですが、『立正安国論』には、

国土泰平、天下安穩は、一人いちひとより万民に至るまで、好むところなり、楽たのしみうところなり。

と述べられています。

宗祖が『立正安国論』に示された通りの災厄の時代を迎え、立正安国、仏教復興、すなわち「仏教は何かをしてくれる」と、人々から期待していただくお寺をつくることが大切であることを、敢て最初に訴え、本日のテーマ「人口減少社会における寺院の在り方とその可能性」について、充実した討議をお願いしたいと思います。